

財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅳ

平成10年～11年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する弥生前期末～中期の環壕遺跡を主とした遺跡群である。

近隣の遺跡としては、本丘陵地内南方に前方後円墳の田和山1号墳、本丘陵の北東に派生する丘陵に弥生中期頃の土壙墓が多数みつかった友田遺跡、本丘陵北西の現松江農林高校付近に弥生土器が出土している欠田遺跡及び門田遺跡の存在が知られている。

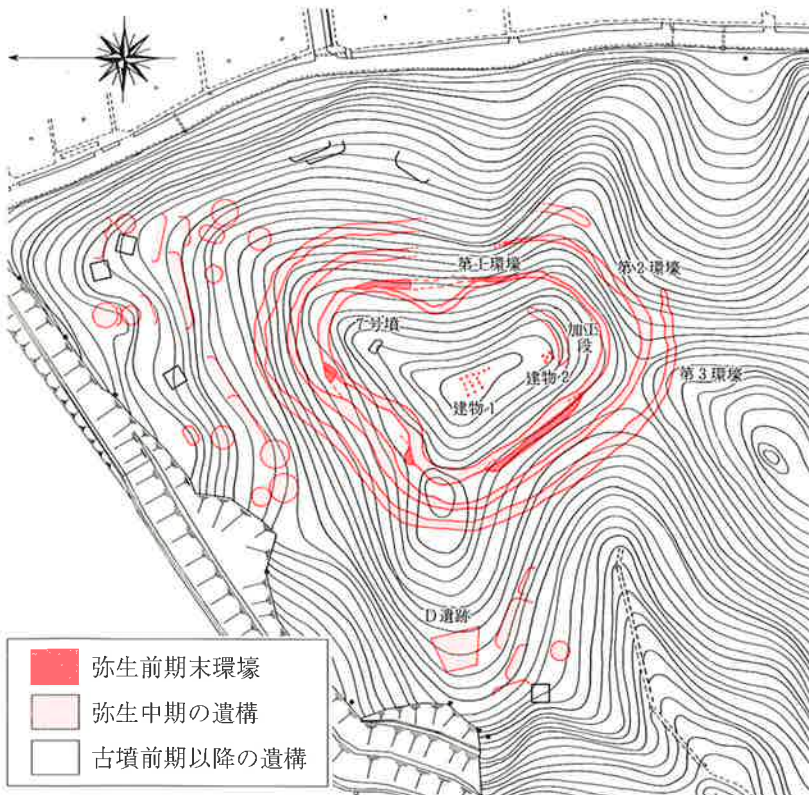
本概要は平成10・11年度の調査で確認された環壕遺跡の弥生前期末頃の環壕と、全掘された第2・3環壕と、環壕遺跡周辺の住居跡等の調査成果を以下のとおり記すものである。なお、環壕遺跡の中心となる独立丘陵頂部一帯（山頂部）や環壕遺跡全域のおおまかな概要は、平成9年度の年報に記しているのでここでは省略する。

1. 環壕遺跡

今回の調査では、山頂部をほぼ一周する弥生中期の第2・3環壕（第1環壕と同時期）と、本丘陵に環壕を造り始めた最初の段階である弥生前期末頃の環壕を確認することができた。

弥生中期の第2・3環壕は北西側～東側と南西側において調査をおこない、これら部分について環壕の存在が確認された。なお、東側の一部においては地滑りの為、環壕が消滅していると考えられたので調査は断念した。

環壕の断面形は第2・3環壕共に深いV字を呈し、環壕外側から内部（山頂部）への進入は極めて



田和山遺跡群遺跡位置図（平成11年度現在）

困難な印象を強く受けるような造りであった。

環壕内からの遺物は、第1環壕と同様に弥生中期の壺・甕が大半を占め、石器類は黒曜石製及びサヌカイト製の石鏃が出土している。また、角のとれた比較的丸い形状の礫石も出土している。これは第1環壕出土の礫石と同様で、本丘陵で存在している石とは異質のものであり、当時の川原等で採取し持ってきたものと思われる。個数は第1環壕ほどは無く、第1環壕～第2環壕～第3環壕とその出土数は減少しているようである。

弥生前期末頃の環壕は、山頂部の西、北西、東側の3箇所を確認されている。いずれも弥生中期の第1環壕のやや斜面下方側から本丘陵の尾根筋部分を掘り残す形で検出しており、丘陵を一周する弥生中期の環壕とは造成形を逸しているものであった。環壕の断面形は緩やかな曲線状を呈し、底部は広く深さの浅いものである。

環壕内からの遺物は、弥生前期末～中期初頭の壺・甕と蛤刃石斧、黒曜石製及びサヌカイト製の石鏃、磨製石剣の切先片等と礫石が出土している。なお、この礫石は弥生中期の環壕から出土している丸い形状のものとは異なり、角ばった石が大半を占めている。この角ばった石はこの丘陵の地山の一部で露出している石材と同様のもので、弥生中期の頃との礫石の採集方法の相違が見られるものである。

まとめ

弥生前期末頃の環壕は1本で尾根筋部分を掘り残し、弥生中期の環壕は3本で丘陵を一周廻らしている。このような各時期における環壕造成の変化は、軍事的緊張度の差異によるものと思われる。すなわち弥生中期の段階が最大の緊張期である。

調査者は弥生中期の段階でこの地で実際に戦いがあったものと考えているが、3本の環壕によって強固に守られた、2棟の建物跡しか確認されていない山頂部の何を守ろうとして、何を奪取するために戦いがおこったのか。今後の十分な検討が必要であろう。



田和山遺跡群 全景（航空写真）

（平成11年度現在）

2. 周辺住居跡

今回の調査では、環壕遺跡の環壕外側斜面の南西側から東側にかけて、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段（掘立柱建物跡?）、柱穴群、貼石遺構、落とし穴状遺構を確認した。ここでは、弥生時代の遺構と古墳時代以降の遺構とにわけ、以下のとおり概要を記すものとする。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡4軒、加工段9所、小柱穴群2所を検出することができた。いずれも弥生中期のものである。

竪穴住居跡は北西側から北東側にかけて加工段と入り交ざるかたちで検出した。この竪穴住居のほとんどは弥生時代の典型的な形状である円形を呈しているが、北側で検出した1軒で方形のものも確認されている。このような形状を呈す弥生時代の竪穴住居跡は鳥取県の青木遺跡などでも確認されているが、この時代では稀なものである。

このほかに北側の周辺遺構最高所にあたる場所から、焼失した竪穴住居跡を1軒確認している。この焼失住居跡は、上部堆積土を除去すると住居内のほぼ全面の土が焼けている状態で、同レベル及び焼土下側からは炭化した木材を検出しており土屋根だった可能性が考えられる。また、住居跡の内外からは黒曜石の原石やチップを検出しており、この住居や周辺において黒曜石を加工して石鏃などを作っていたものと思われる。

掘立柱建物跡及び加工段（掘立柱建物跡?）は、南西側の一部と竪穴住居跡と同じ北西側から北東側にかけての範囲で検出している。このうち南西側の掘立柱建物跡の1軒はやや大型のもので、床面からは台形土器が出土している。

加工段は、ほとんどが多数の柱穴を伴っているものであり、ここに掘立柱建物等が建っていたとすれば数回の建て替えがあったものと思われる。

弥生時代の遺構からの遺物は、弥生中期の壺、甕、高杯、土玉及び、磨製石剣、石包丁、石鏃（黒曜石、サヌカイト）、黒曜石の原石が出土している。



焼失した竪穴式住居跡（弥生中期）

古墳時代以降の遺構

古墳時代以降の遺構は古墳中期の竪穴住居跡3軒、平安～中世の掘立柱建物跡3軒を検出することができた。

古墳中期の竪穴住居跡は北側で検出しており、いずれも方形を呈すものである。遺物は土師器の壺、高杯、須恵器の蓋、砥石が出土している。

平安～中世の掘立柱建物跡は東側で検出しており、遺物は土師器片、須恵器片が出土している。

この他の遺構として、貼石状の遺構と落とし穴状遺構が確認されたが、いずれも遺物は出土せず、遺構の時期等は不明である。ただ、貼石状の遺構については弥生中期の加工段の上に造られており、これより新しい時期の遺構である。

まとめ

以上のとおり今回おこなった環壕外側斜面の調査では多数の住居跡が確認でき、貴重な資料が得られたと思われる。

なかでも、弥生の住居遺構は中期に限定され、この田和山丘陵に環壕が造られ始める弥生前期末頃の住居遺構が皆無であったことは、この遺跡の性格及び存在価値が時代ごとに変貌していることを現すものではないだろうか。これは前述の環壕遺跡でも述べたとおり、この遺跡の弥生中期における軍事的緊張期をも示しているのかもしれない。

今回の調査では、この田和山遺跡の全貌を知る上で非常に重要な手がかりが得られたものと考えているが、今後より一層の遺跡解明に向け、周辺の遺跡はもちろんのこと、もっと広い地域の遺跡をも視野に入れ検討する必要があるものとする。

(落合 昭久)



南西側の弥生時代掘立柱建物跡

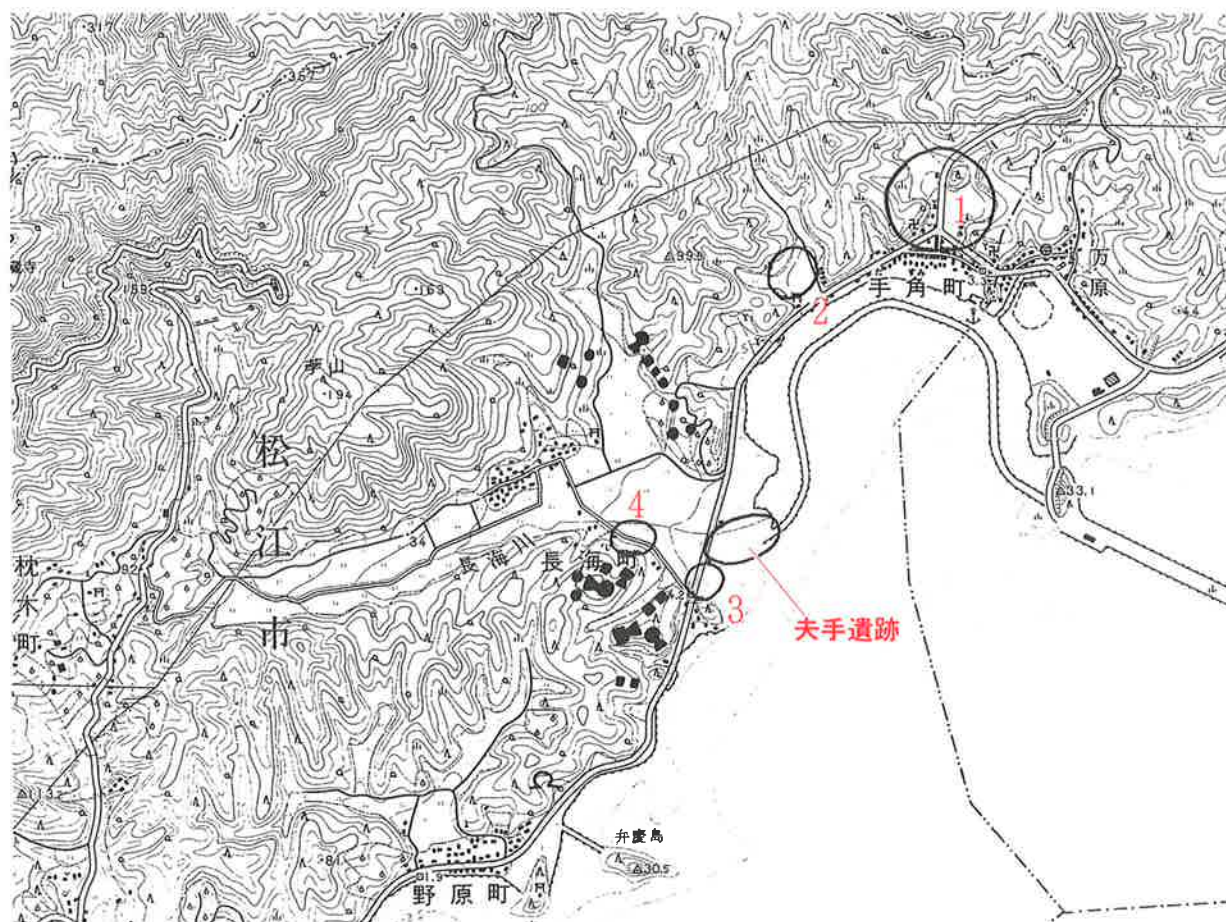
夫手遺跡

夫手遺跡発掘調査は、島根県松江農林振興センターによる「手角地区ふるさと農道整備事業」にともない、平成10年4月10日から同年12月11日まで2700㎡について開発に伴う緊急発掘調査を実施したものである。

夫手遺跡は、島根県松江市手角町469-5外に所在する。

長海川河口に位置しており、主として長海川の氾濫にともない上流から大量の遺物が運ばれて埋没した低湿地の遺跡である。部分的には縄文時代前期の自然地形を検出した。

調査区西端付近の最下層では、縄文時代前期の泥土層を確認し、泥土の状況から、そこは水の流がほとんど無い沼地状の地形であったことがわかった。その泥土の中に打ち込まれた状態で、約30本の杭を検出したが、その性格については不明である。泥土中からは他に4本の櫂が出土しており、そこは長海川もしくは中海に通じる船着き場に利用されていた場所であったことが推察された。櫂は全てスギ材で作られたもので、炭素14年代測定ではいずれも現在より概ね6000年前のものであるとの結果を得た。これらの櫂はすべて柄が折れているため全長は不明であるが、水掻き部分が幅、長さとも



夫手遺跡位置図 (1 寺の脇遺跡 2 権田作遺跡 3 柳瀬遺跡 4 杉戸遺跡)

に小さい点を特徴とし、ほぼ同時期の権と較べても小さく、ましてや日本海の外洋に漕ぎ出すにはあまりにも心許ない印象を受けるものであった。

また、調査区ほぼ中央付近では幅が狭く浅い小川を確認し、その砂層中から小型の縄文土器1点が単独で出土した。この縄文土器は西川津式の小型の鉢で、内面には漆が厚い層をなして付着しており、外面にも多少の付着が認められ、漆液容器として利用されていたことが判明した。この漆を分析したところ、クロメ漆の状態であることがわかり、接着剤としてではなく、すでに塗り物の材料として利用されていた可能性が高くなった。さらに、漆の中に少量の赤色顔料が混入していたことから、同時に別の容器で赤色漆が作られていたことも推測された。この漆の一片で炭素14年代測定を実施したところ、現在よりも6800年前のものであるとの結果を得た。この年代は全国的な視野から見ても、時期判定がおこなわれた漆としては最古級の範疇にはいる資料である。夫手遺跡において縄文時代前期からすでに高度な漆工技術、漆文化が存在していたことが明確となり、また西川津式土器に実年代を当てはめることができたことにおいて、実に貴重な発見であったと考える。

最下層である縄文時代前期層の上には、薄い無遺物層を挟んで大量の遺物を含む青灰色砂礫層の堆積が見られた。この層に含まれた遺物は長海川上流に立地する遺跡に付随する遺物が土石流によって



夫手遺跡発掘調査風景

いっきに流されてきたものであり、上流に存在する遺跡の時期や性格を反映しているものと思われる。したがって、これらの遺物を観察することによって長海平野に存在する遺跡の一端をかいま見ることができるであろう。

青灰色砂礫層に含まれていた大量の遺物は、時期的には縄文時代早期から古墳時代中期までの幅広い時期のものが認められた。しかし、出土点数の割合を見ると縄文時代から弥生時代にかけての遺物はきわめて少量で、大部分は古墳時代前期後半から中期にかけての比較的残存状況が良い遺物で占められていた。種別では大量の土器の他に木製品が多数含まれており、機織り具や火鑽臼、農具未製品、建材など生活に直結した道具が多く見られた。このことから、長海川流域では縄文時代から細々とではあるが継続的な生活が営まれており、古墳時代前期末から中期にかけて大規模な集落が存在していた様子がうかがえる。

そこで改めて長海川上流の周知の遺跡分布状況を眺めてみると、長海平野の特に中海側に近い低丘陵上には中規模クラスの古墳を含む多くの古墳群、淵切古墳群、藤田古墳群、藤田南古墳群、堀越古墳群が立地している。淵切り古墳群を例にとると、全長33.1mの前方後円墳1基、全長20.5mの前方後方墳1基、直径20mの円墳1基のほか陪塚とも考えられる小規模古墳も多数築かれている。これらの古墳群は調査されていないため時期は不明だが、後期という積極的理由が無いことから、前期から中期にかけて築かれた古墳と考えて良いのではないかという説がある。出雲地方における中規模クラスの古墳の数および分布地は非常に限られており、中海沿岸の島根半島側での分布は現時点では長海川流域しか知られていない。中海を見おろすように複数の中規模クラスの古墳が密集して築かれている点から、長海平野に本拠地を置いた豪族は、狭い長海平野だけではなく、広く中海沿岸一帯をも支配した一大勢力であったと思われる。

では、これらの古墳群を築いた人々の生活の場所はどこにあったのであろうか。淵切古墳群が立地する丘陵の北東側裾部の緩傾斜地で採砂工事中に杉戸遺跡が発見されている。この遺跡は調査されずに工事が進められており、現在はほぼ消滅状態にあるため詳細は不明であるが、わずかに古墳時代中期の土器や炭化米の採集が伝えられている。もし、大古墳群を築いた人々の集落跡がこの杉戸遺跡周辺に存在していたと仮定すると、現在推定されている杉戸遺跡の範囲だけではとてもおさまりきれないであろうから、遺跡はもっと長海平野の低地部分にも広範囲に広がっていた可能性が高いと思われる。そうであったとすると、低い場所に営まれていた集落の一部が、長海川の氾濫に巻き込まれて下流の夫手遺跡まで遺構ごと押し流されたとは考えられないであろうか。

ちなみに、古墳時代後期以降になると長海平野の遺跡数は激減し、南西の本庄町に遺跡分布の集中が見られるようになる。古墳時代中期に多くの遺物を残した豪族は、後期に継続することなく、忽然と長海平野から消え去っている。

(江川 幸子)



縄文時代の漆液容器 内面に残る漆（永嶋正春氏撮影）



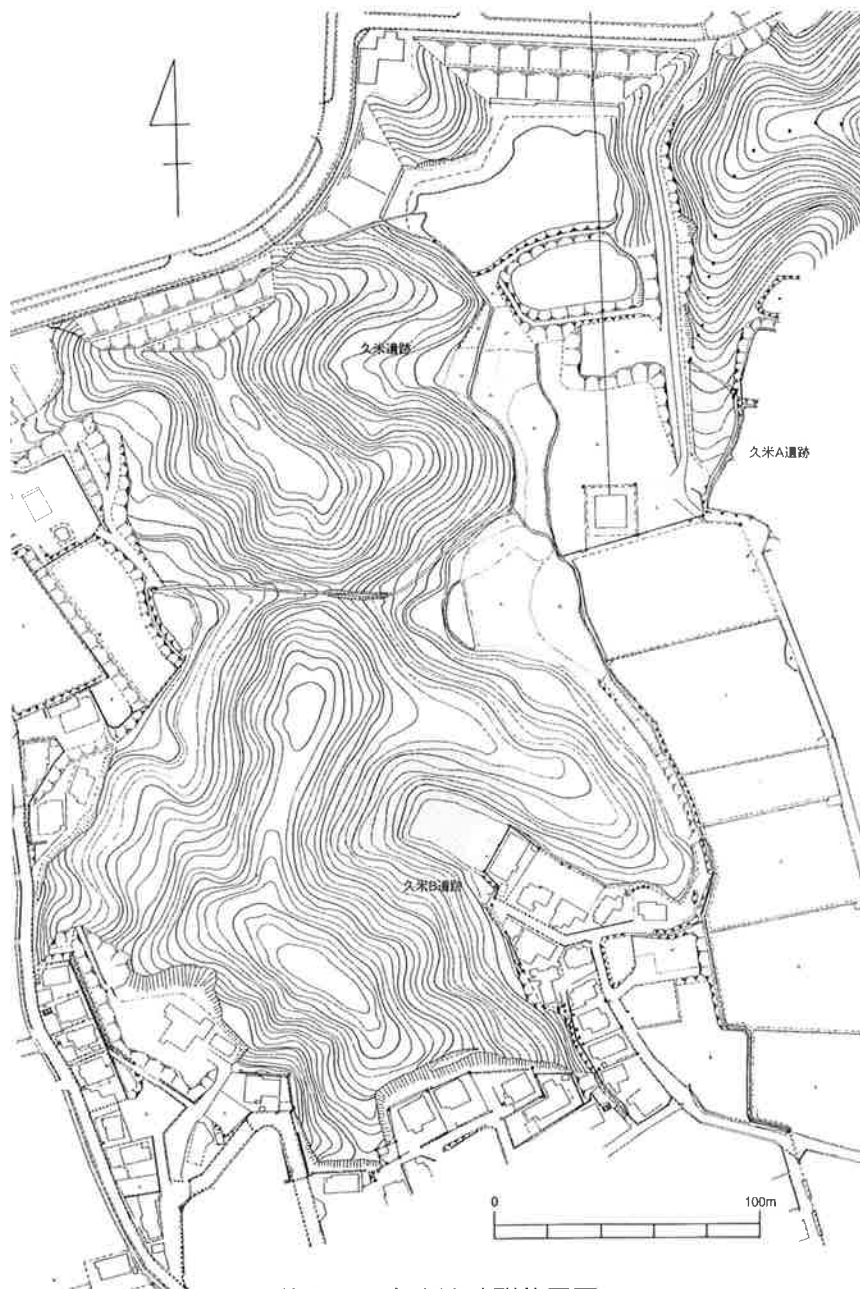
縄文時代の櫛

久米遺跡群

久米遺跡群は法吉町から比津町にまたがる丘陵地帯に位置し、各遺跡は谷を挟んで両側に存在する。本遺跡群は斜面中腹を加工して住居址をつくる小集落である。(第1図)

(1) 久米遺跡

本遺跡群内の最北端、東側に伸びる低丘陵の南向き斜面に位置し、地形は東側に口を開いたようなすり鉢状地形である。平成2年に松江市教育委員会が調査をおこない、計13棟の掘立柱建物跡を確認した。南向き斜面を上下2段に分けて住居をつくっているが(上段:6棟、下段:7棟)、住居址から遺物が出土していないため、時期差があるのかまた同時期に存在したのかは不明である。また斜面のため、盛土部分が流されやすく、住居址の規模が正確にわかるものはなかった。



第1図 久米遺跡群位置図

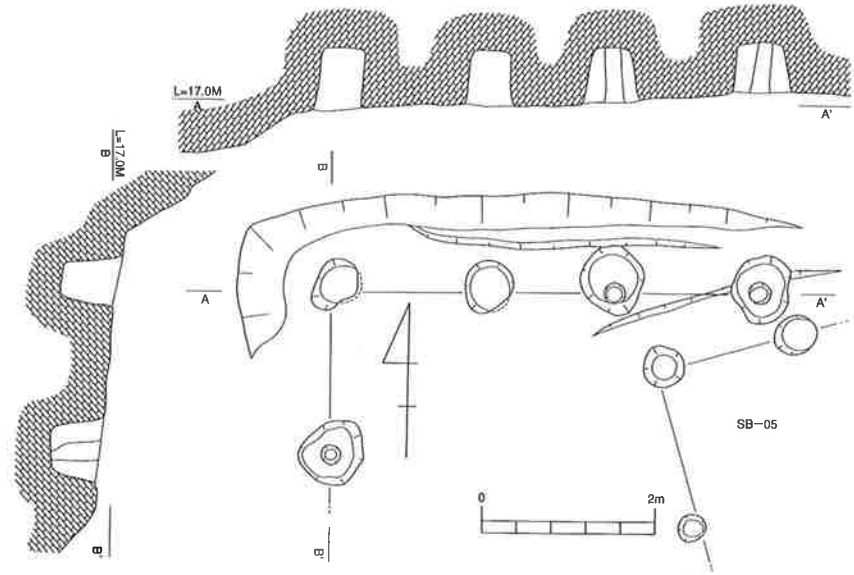
遺物は遺構に伴って出土したものはなく、その大半が上層の遺物包含層である灰褐色土層から出土している。出土遺物は須恵器の高坏・坏身・坏蓋・壺甕類、土師器の甕・甑・カマドなどの生活用品が多数出土している。本遺跡の時期は、遺構の床面から出土していないため時期の限定は困難だが、おおよそ奈良時代～平安時代初めにかけての集落ではないかと思われる。

第2図は下段部の最西端から検出した掘立柱建物跡(SB-04)で、北西隅をL字型の加工段で区画している。柱穴の配置は桁行き3間、梁行きは床面の流失や他の住居址の重複

のため1間しか確認できなかった。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径25cm前後の柱が使用されていたと推測される。残念ながらこの住居址から遺物は出土しなかった。

(2) 久米A遺跡

本遺跡群の西側、久米遺跡から谷を挟んで東側に位置する。地形は南側に伸びる低丘陵で、緩斜面で南向き斜面である。平成3年に松江市教育委員会が調査をおこない、掘立柱建物跡を2棟確認した。

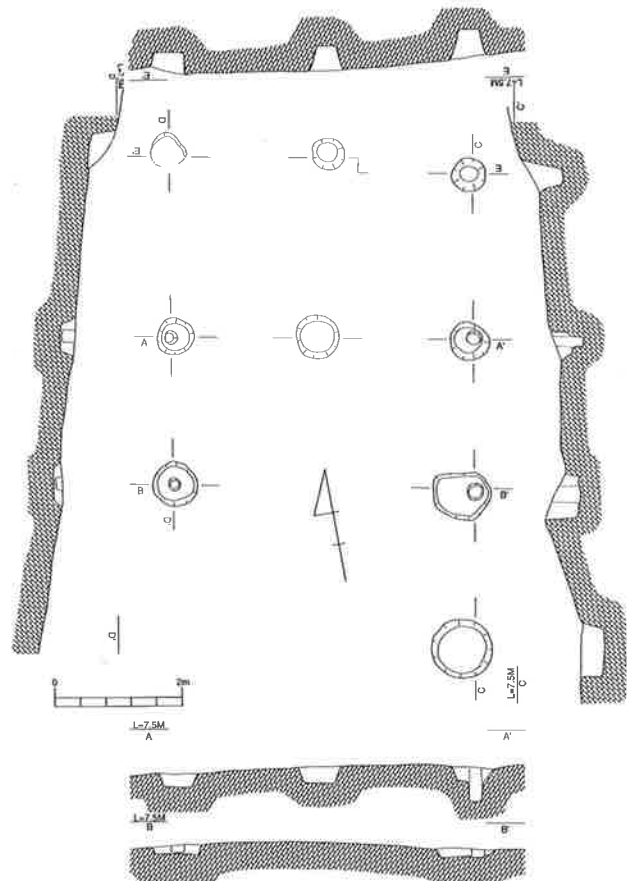


第2図 SB-04 (久米遺跡) 平面図

久米遺跡と異なり、盛土部分の流失などはあまり見られないが、調査前は畑として使用されていたため、遺構上面は削平されており、検出された柱穴などは浅い。

出土遺物は須恵器や土師器の破片が出土したが、遺構床面からではなく、形状や規模がわかるものは少なかった。遺物から本遺跡の時期はおそらく8世紀中頃～9世紀頃と思われる。

第3図は検出した掘立柱建物跡(SB-02)である。柱穴の配置は桁行き2間、梁行きは3間確認できた。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径15～25cm前後の柱が使用されていたと推測される。残念ながらこの住居址から遺物は出土しなかった。



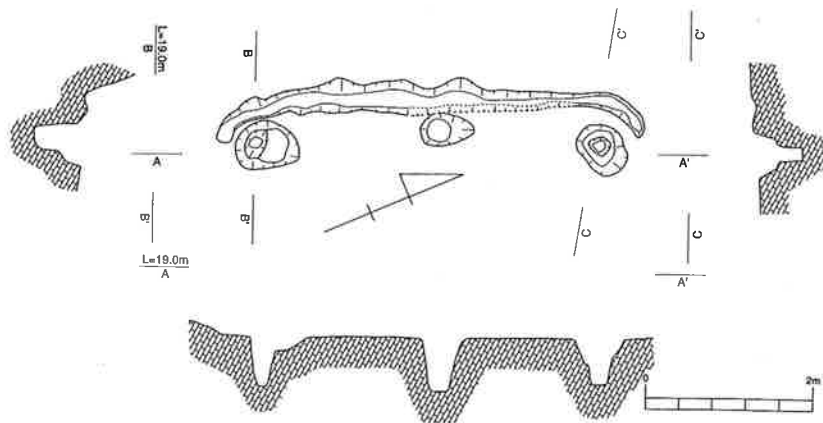
第3図 SB-02 (久米A遺跡) 平面図

(3) 久米B遺跡

本遺跡群の南側、久米遺跡と同じ丘陵で、谷を一つ挟んで南側に位置し、地形は東側に口を開いたすり鉢状地形である。

掘立柱建物跡は東向き斜面に9棟、南向き斜面からは2棟検出されている。

竪穴住居は谷部平坦面から検出した。住居址の覆土層や付近のトレンチから須恵器は坏身・坏蓋・高坏・壺・横瓶などが、土師器は



第4図 SB-01（久米B遺跡）平面図

甕・甑・カマドなどの生活用品がそれぞれ大量に出土した。斜面の住居址からの出土遺物に比べて時期的に古く、単独でこれだけ使用したとは考えにくく、上部に掘立柱建物跡以外の遺構が存在し、そこから落ちたものか、故意に廃棄したものではないだろうか。

それ以外の遺構は炭焼き用の焼成土壌を含めた土壌が6穴、加工段状遺構2基を検出した。

遺物は弥生時代後期初め頃の壺形土器から16世紀代の肥前系陶器碗と思われる遺物が1点ずつ出土しているが、大半は古墳時代後期と奈良時代～平安時代初めの2グループに分けられる。

本遺跡は出土した遺物から谷部平坦面を中心に古墳時代後期には何らかの遺構が存在していたが、奈良時代～平安時代初めにかけての集落が斜面を中心に存在していたことがうかがえる。

第4図は東向き斜面の上段部最南端で検出した掘立柱建物跡（SB-01）で、北側を溝で囲むように区画している。柱穴の配置は桁行き3間、梁行きは床面の流失などで不明である。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径25cm前後の柱が使用されていたと推測される。この住居址からは擬宝珠形のつまみのついた須恵器の坏蓋や底部に回転糸切痕のある坏身などが出土した。これらの遺物から奈良時代～平安時代初めの住居址と考えられる。

（4）まとめ

本遺跡群は特徴として以下のことが上げられる。

- ①掘立柱建物は斜面を加工して造る。
- ②斜面を削った際の土砂を盛土して平坦面を拡張している。そのため盛土した部分が弱く、流失してしまった可能性が高い。
- ③出土遺物は古墳時代後期ものと奈良時代～平安時代初めにかけてのものが多い。
- ④土師器のカマドや甑など生活用品と思われるものが多く出土している。

本遺跡群は谷を囲むように三方に丘陵があり、各遺跡はその谷に向かって集落が形成されている。恐らく生活空間は斜面であり、生産基盤である田畑は谷部に作っていたのではないだろうか。しかしながら谷部に関しては調査が行われなかったため、断言はできないが谷部を含めた丘陵全体が大集落だった可能性が高い。集落を考える上で生活空間だけではなく、生活を支える生産基盤を含めた空間を考える必要がある。その意味からも本遺跡群はその可能性を秘めている。

いずれにしても現在まで松江市の橋北地域では奈良時代～平安時代初めにかけての大規模な集落は調査されておらず、今後の周辺の調査によってより明確な様相がわかるだろう。

（石川 崇）



久米B遺跡 SB-01



久米B遺跡 南向斜面

門田遺跡

門田遺跡は松江市乃木福富町地内に所在する。

門田遺跡発掘調査は、松江土木建築事務所の計画する道路建設事業に伴い平成11年6月10日から平成11年12月9日にかけて実施したものである。調査区の面積は1,500㎡、現況は田圃及び畑地である。

本遺跡は松江市南部に広がる丘陵地から北に伸びる尾根の突端と、宍道湖に向かって北流する忌部川に挟まれた河岸段丘上に位置している。

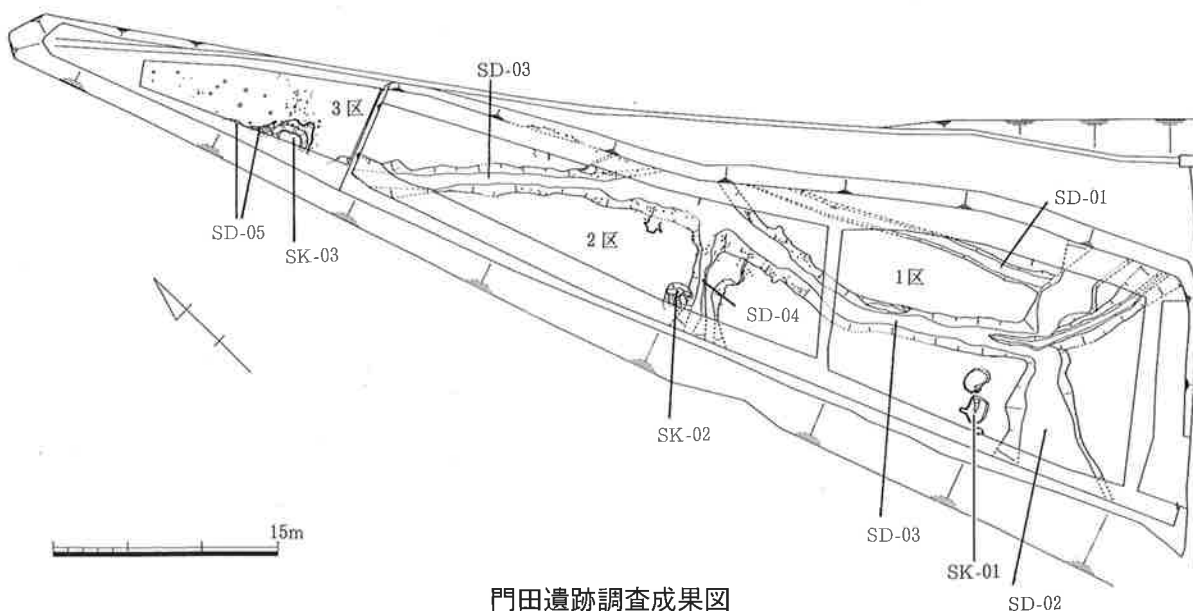
調査対象範囲を三区に分けて調査を行なった結果、自然流路跡を2条、溝状遺構を3条、土壇を3基、柱穴を17個、そして溝状遺構に伴って杭列跡を検出した。

調査区南側の1区で検出された自然流路跡SD-02は西方からの水流の跡と考えられる。埋土からは弥生中期から後期初頭の土器の他、石製品や土玉が出土した。

SD-01は1区東側で検出された水路跡と思われる溝状遺構である。遺構の幅は約1m、深さは約0.5mである。埋土中から出土した遺物は、時期的に弥生中期中葉の壺甕類に限られる。

溝状遺構SD-03は水路跡と思われ、今回の調査で確認された最も規模の大きな遺構である。確認された長さは約50m、幅は2～3メートルであり、断面形はU字状である。この遺構に沿う形で木杭跡が検出され、水路の護岸を目的として打ち込まれたものと考えられる。遺構埋土からの出土遺物は、弥生中期中葉から後期中葉にかけてのものであり、遺構に伴う出土遺物の中では最も新しいものが出土している。遺物の種類としては壺甕類、高杯の他、多数の石製品や用途不明の木製品が出土した。

3区として調査を行なった調査区北側では住居跡は確認できなかったが、柱穴跡と思われるピット群が検出された。この遺構上層から黒曜石片が多数検出されたことから、石器製作場としての簡易的な建物が存在していた可能性が考えられる。



本遺跡からは土器片、石製品などに混じり分銅形土製品が2点出土した。この遺物は祭祀関連の遺物として理解されているもので、松江市内では他に布田遺跡で10点、西川津遺跡で6点、タテチョウ遺跡で2点の出土例が報告されている。(1)

今回の調査では、水田用の水路と考えられる溝状遺構とそれに伴って、数多くの土器や大型石包丁などの石製品が出土した。住居跡こそ確認されなかったものの、これらの遺物は、稲作を中心とした当時の人々の生活を物語るものである。

(古藤 博昭)

(1) 勝部智明、松本岩雄、守岡正司「山陰地方分銅形土製品集成」『古代文化研究』第8号 島根県古代文化センター 2000年3月



分銅形土製品

土玉



門田遺跡出土遺物